金光教の声

（平成22年4月～6月放送分）

No. 391

【もくじ】

恋愛の悩み／金光教の本・・・・・・・・・・・・3
ペットのお願い／交通安全祈願・・・・・・・・7
服のお下がり／あいよかけよ・・・・・・・・・11
毎日空しい／人の好き嫌い・・・・・・・・・・15
草さん、ごめんなさい・・・・・・・・・・・・19
油断、慢心、大けがのもと・・・・・・・・・・24
海は誰のもの？・・・・・・・・・・・・・・・29
先生、オレオレ　実です・・・・・・・・・・・34
しあわせ探し・・・・・・・・・・・・・・・・40
わが家の園芸日記・・・・・・・・・・・・・・44
いまさら・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
ニューヨークの女神・・・・・・・・・・・・・52
ごめんね・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

恋愛の悩み／金光教の本

松本信吉

おはようございます。東京都麻布教会の松本信吉です。

神奈川県にお住まいの20代の女性からこのようなお手紙を頂きました。

「私には2年間付き合った彼がいました。とてもまじめで、何事にも一生懸命な彼で、私のことを大切にしてくれる人でしたので将来のことも考えていました。しかし、ある時、私は街でステキな男性に声をかけられて、それから連絡を取るようになり、いつの間にかその人のことを好きになってしまいました。以前付き合っていた彼には『好きな人が出来ちゃったから別れて』と言って、新しい人と付き合うことになったのですが、その人はいつしか他の女の人に関心を持ち、私のことは大切にしてくれなくなりました。今では、ほとんど会うこともありません。本心では、前の彼とヨリを戻したいのですが、こんな私はどうしたらいいでしょうか」。

このようなお便りを頂いています。

そうですか。あなたは将来のことも考えていたのに、一時の気の迷いで取り返しのつかないことをしてしまったと思っているのでしょうね。気持ちはよく分かります。

まず落ち着いて自分の心の内を見つめて下さい。

一人になる時間も実は大切なのです。あなたが彼に対して今までにしてきたことを振り返ってみて、自分が彼の立場だったらどう思うか、考えてみてはどうでしょうか。

私は結婚して13年になりますが、妻に何度プロポーズしてもなかなか受けてもらえませんでした。最後にプロポーズした時も芳しい返事がもらえず、私はもうダメだとあきらめて、最後にお別れの言葉を言おうと思った時、自然と「今までありがとう」とお礼の言葉が出たのです。その時に妻から「よろしくお願いします」という返事がもらえたのです。

あなたも、本当に感謝の気持ちが伝わり、ご縁があれば、彼も考え直してくれるかもしれません。

また、あなたのお手紙には「私のことを大切にしてくれない」と書いてありますが、あなたは、今まで付き合ってきた相手のことを本当に大切にしてきましたか？

前の彼とヨリを戻したいということですが、本当にあなたが幸せになるには、感謝の気持ちが持てるかどうかということが一番大切だと思います。あなたの心が感謝の気持ちでいっぱいになり、幸せな恋愛ができるように祈っております。

北海道にお住まいの50代の男性から次のようなお便りを頂きました。

私は毎週「金光教の時間」を聞いております。いつもステキな放送をありがとうございます。金光教の教えをもっと知りたいのですが、金光教の本を借

りたり、購入することは出来ますか？

このようなお便りです。

ありがとうございます。金光教では、教典を始め、絵本から外国語書籍に至るまで、たくさんの本を出版しています。

岡山県金光町にある金光図書館は金光教についての本を始め、一般の図書も含めて約23万冊が置かれています。また販売しているお店もあります。

例えば私のお薦めは金光教の教えを集めた『天地は語る』という本です。この本は「仕事」「病気」「家庭」など、項目別に編集した、持ち歩きやすいサイズになっています。

この中で私の好きな教えは「わが子のかわいさを知って、神が人間をお守りくださることを悟れよ」です。

私も7歳の女の子と3歳の男の子の父親です。子どもができるまでは「親の無償の愛」というのが、今一つよく分からなかったのですが、自分が親になってみて分かってきたような気がします。同じように神様は、いつも私たちを無償の愛で守って下さっていることに、気付かせてもらうことが多いように思います。

そんな時にこの教えを読むと、神様に願っても、自分の思うようにならないことがある時に、自分は今、子どもがお菓子をねだったりすることと同じようなことをしているのかもしれない。本当にその願

いがかなうことが今、必要なのか、神様はそこをよく見計らって下さっているのではないかと思えてくるのです。

この『天地は語る』のページをめくると、今、自分が抱えている問題をどうしたらよいか、その解決のヒントが必ず見つかります。

また、昨年、金光教の誕生150年を記念してＤＶＤアニメ『金光さま ―とりつぎ物語―』が制作されました。心温まる35分のアニメで、金光教祖の教えによって助かっていった人々の物語です。子どもが見てもよく分かる作品に仕上がっていて、大人が見ても癒やされる内容ですので、ぜひ、一度、ご覧下さい。

このような書物などご希望の方は、金光教本部、あるいは最寄りの教会へお尋ね下さい。

あなたの今日が、生き生きとした一日でありますように祈っております。

ペットのお願い／交通安全祈願

石黒眞樹

おはようございます。愛知県、金光教幅下教会の石黒眞樹です。東京都にお住まいの50代の女性の方からのお便りを紹介します。

「私は犬を飼っています。可愛いくてしかたがないのですが、よく病気をするので世話が大変です。金光教では、ペットの病気が良くなるように、神様にお願いできるのですか？」

こういうご質問です。

なるほど、私も、大の犬好きですから、よく分かりますよ。ペットが与えてくれる安らぎは、何ともうれしいものですが、病気になっても、ものが言えないので、飼い主は本当に心配になりますよね。

金光教では「人間の身の上のことはもちろん、家畜のことも真心を込めて、何でも神様にお願いしなさい」と教えています。ですから、犬でも猫でも、どんな生き物のことでもお願いしてもよいのですよ。ペットも家族の一員ですからね。

その一方で、教祖は、猫が好きだった娘さんに「生き物を、やたらに飼うな。骨が折れるぞ」と諭しておられます。命あるものを引き受けるには、余程の覚悟がいる、ということだと思います。世間は、過剰なほどのペットブームで、飼い主の都合で、途中で投げ出すことがあるようですが、悲しいことですね。本当に、軽い気持ちで命あるものを引き受ける

ことは出来ませんね。

実は私も、このことを知りながら、可愛さに負けて犬を飼ってしまいました。あなたがおっしゃるように「世話が大変だなあ」と感じることもよくあります。あなたも「好き」というだけでは済まされない、責任を感じておられるのでしょうね。でも、そのことで、命の尊さを学んでいくことが出来ます。

たとえ、小さな生き物であっても、軽んじることなく命を尊ぶ優しいまなざしは、信心をするしないにかかわらず、誰もが持っていてほしいと思います。

ペットのお悩みでも、ぜひ金光教の教会にお参りして、お話を聞かせて下さい。

次に、京都府にお住まいの20代の男性からのお便りです。

「このたび念願の自動車を買いました。いろいろな宗教では、車のおはらいやご祈とうをしてくれますが、僕は、そんなことぐらいで、事故に遭わなくなるとは思えないのです。かといって、これだけ激しい交通事情では、何かしないと心配です。金光教ではどうしているのですか？」。こういうご質問です。

そうですね。おっしゃるとおり、いくら自分が注意していても、交通事故は相手があることですから、本当に心配ですね。例えば、一瞬の違いで、出会い頭で事故に遭うか、何もなく通れるかという大きな違いになるのですから、自分の力だけでは何ともな

らないのが、車の運転ということでしょうね。

一般的なおはらいというのは、神に祈って、災いなどを取り除くことを言います。すがすがしい思いになって、神様に守って頂こうというのは、古くからの日本人の習慣で、自然なことだと思いますよ。

金光教の教会でも、それぞれの教会で、身の上安全と、車の安全を祈る祈願をしていますよ。

たとえば、車検証とかキーを神前にお供えして神様にお祈りをします。また、古くなったから乗り換えるというだけでなく、これまで使わせてもらった車にもお礼のお祈りをします。お参りされている人の中には、感謝を込めてピカピカに磨いて、車へのお礼の手紙を入れて廃車した、という人もいるそうです。

また、そのような安全祈願とともに、日常での祈りも大切です。私は、ハンドルを握る前に、必ず手を合わせて祈ります。自分も運転に気を付けるように、また、周りの方々の安全もお願いし、そして「車さんよろしく頼みます」と車にもお願いしてから発車です。もちろん、運転マナーにも気を付けたいですね。

ある方のお話ですが、ご家族が何度も事故に遭いました。運が悪く、車にぶつけられることが続いたのです。それで「この車はついていないなあ」と事故を車のせいにしていたのです。そんな時に、金光教の先生から「車も天地の恵みですよ。地中の鉄鉱石が高熱に溶かされ、打たれて鉄板になり、車や機械になるのです」というお話を聞きました。その方

は、工業製品が天地の恵みだとは考えてもいなかったのです。そこで、よく考えてみると、事故に遭っても、家族はたいしたけがもなく済んでいるのに、車は痛々しい姿です。それで、車が身をもって自分たちを守ってくれたのじゃないかという思いがわいてきて「ついていない車だ」と言ったことを申し訳なく思ったそうです。そして、この車も、自分たちのために神様がお与え下さった天地の恵みなのだと気付き、感謝をするようになりました。それからは、事故もなく安全に過ごしておられます。

このたび、あなたも、きっと努力されて車を手に入れられたことと思います。あなたの車も、あなたの努力はもちろんのこと、神様があなたにご用意下さったものです。どうぞ安全に事故なく使って下さい。

金光教では、動物や植物など命あるものはもちろん、車など、身の回りのあらゆる物にも感謝する生き方をしていきたいと願っています。お互いは、同じ天地の中の存在同士。「お世話になります」という心で大切にし合えば、とても幸せな世界になると思いますよ。

服のお下がり／あいよかけよ

井上宗一

おはようございます。滋賀県は、琵琶湖のほとりにある金光教湖北教会の井上宗一です。

さて、最初のお便りです。愛知県にお住まいの聡子さんとおっしゃる39歳の女性から、次のようなお悩みを頂いています。

「私には3人の子どもがいます。上から長男、長女、そして次女と授かっています。長男と長女にはそれぞれ新しい服を着せていますが、次女は今までずっとお下がりを着せています。ところが最近になって「私も新しい服が欲しい」と言い出し、私はその一言にハッとしました。

『黙って着てなさい』と強くおっしゃる人もあるでしょうが、私にはそれもどうかなと思い、何と言えばいいかと、ずっと考えています。つまらない悩みと思われるかもしれませんが、何かアドバイスをお願いします」

このような内容です。聡子さん、お便りありがとうございます。

さて、お子さんの一言に対して、放っておけない引っかかりをもたれることは、子育ての上に大切なことだと私も思います。あなたは「つまらない悩み」とおっしゃいますが、決してそうは思いませんよ。

小さな心が傷つき、時には悲鳴をあげていることがあります。何気ない一言に、子どもからのＳＯＳが潜んでいることもあるように思います。あまり神経質になるのもどうかと思いますが、お子さんが育つ大切な時期に、そばにいてじっくり向き合うことこそ、子育ての大切な役割ではないでしょうか。一緒に考えてみたいと思います。

　できることなら、下の子にも服を買ってあげたいと思っておられることでしょう。でも、まだ使えるお下がりもあるし、当然経済的なこともありますから、下のお子さんにはどうしても辛抱を強いることになりますね。

　さて、この場合、お下がりの服に古いとか新しいという価値観で比べると、どうしても新しいモノが欲しくなるでしょう。でも例えば、世界に一つだけのという、オンリーワンのような視点でお下がりがみられると、古い新しいではない別の値打ちが出てきはしないでしょうか。

　「お姉ちゃんが大好きだったお洋服、もらえて良かったね」と、こんな言葉一つでも子どもには違った何かが伝わるのではないでしょうか。

　ただ、お子さんが辛抱しているその気持ちに変わりはないので、グッと抱きしめてあげて、「お洋服さんも喜んでいるね」なんて、優しく声がかけられると、お子さんの辛抱も安心に変わるような気がしますがいかがでしょう。

次は、東京都にお住まいの夏美さんとおっしゃる20歳の女性からです。

「愛をかけろ」と言う言葉が金光教にあると、友達から聞きました。その時は「へぇー」って聞き流してましたが、実は、最近好きな人が出来、その言葉を思い出しました。何だか命がけの恋をするようなこの言葉にビビッときたのですが…。これって恋愛成就のおまじないですか？　そうだとしたら、私、この「愛をかけろ」にマジ賭けてみたいと思うんですが…。

このような若さあふれるご質問です。夏美さんありがとうございます。

さて、せっかくですが夏美さんにおわびを一つ…。実は「愛をかけろ」ではなく「あい『よ』かけ『よ』」というのが正しいんです。愛情の「愛」ではなく、ひらがなで「あいよかけよ」です。ちょっとがっかりさせたでしょうか。

でもラジオのスイッチは、このままにして少し私の話を聞いて下さい。

時代劇に登場する「エイホッ、エイホッ」の駕籠（かご）担ぎを思い出して下さい。「あいよかけよ」もその駕籠担ぎと関係があって、その時代に岡山県の辺りで使われていた言葉だそうです。駕籠担ぎでは担ぎ手の男二人が、前と後ろで調子を合わせるためにかけ声を出し、その調子が合った時にうまく担げるんですね。そのことを「あいよかけよ」と言っ

たんだそうです。

金光教の教祖、金光大神も、神様と人間とが「あいよかけよ」にならないと立ち行かない、と教えられたことが、金光教の大切な考え方、キーワードとして伝えられているんですね。

さらに、神様と人との間柄だけでなく、人と人との関係においても、更には人とモノとにおいても「あいよかけよ」が必要で、すべてのかかわり合いが「あいよかけよ」で成り立つというのが教えの中心にあるのです。

例えば、あなたが誰かと話をする時のことを考えてみて下さい。会話は一人では成立しません。話す相手があって初めて会話が成り立ちますね。話す人と聞く人、その関係が入れ替わり、話していた人が聞く側に、聞いていた人が話す側に…。そうして互いが入れ替わり立ち替わりしながら会話が成立する。

このようにお互いがかかわり合うような働きを「あいよかけよ」といっています。つまり相手が「あっての」ことです。一人では決して成り立ちません。

神あっての私、親あっての私、あの人あっての私…と、すべてが「あいよかけよ」につながっていくことになるんですね。

夏美さんの聞き間違いからのお尋ねでしたが、好きな彼との恋愛も、彼あっての私、君あっての僕、という関係があってのことですね。ズバリ！　恋愛成就のおまじないは、好きな人を大切にすることと言えるでしょう。

夏美さん、いかがでしたか？　金光教の大切な教えです。記憶のどこかに留めておいて下さいね。もし何かお悩みでしたら、一度最寄りの教会を訪ねてみて下さい。恋愛のお悩みでももちろん聞かせて頂きますよ。

毎日空しい／人の好き嫌い

鳥越正克

おはようございます。福岡県の筑豊にある金光教漆生教会の鳥越正克です。

早速ですが、大阪府に住む29歳の女性から、次のような質問のお便りです。

「私が勤める会社は残業ばかりで、自宅と会社を往復する毎日でむなしいのです。同居している両親に家のことを任せっきりで、何もする気になれません。

『毎日が楽しくない』と友人に相談すると、友人が私のことを気にかけて『一度金光教の教会にお参

りしてみない？』と誘ってくれますが、教会に行くと何か得をすることがあるのでしょうか？」

こういうお便りです。

そうですか…、あなたも大変ですね。ここで少し、あなたの日々の生活を想像してみましょう。あなたは朝起きたら、食卓に用意されたホカホカの朝食を、急いで食べます。食事をして飛び出すあなたを、追いかけるようにして「お弁当よ！」と、お母さんの声。夜遅く帰宅すると、「疲れたでしょう」と迎えて下さるご両親のうれしそうな顔。そしてあなたを待つ間、何度も温めなおしたであろう料理が、目の前に。よい加減に沸いた風呂の後は、布団に潜ってバタンキュウの毎日、こんな感じではないでしょうか？

そうとしてあなたは、「参拝すると何か得をするのか？」といったお尋ねでしたね。世の中には、人から損だと見られる事柄でも、ありがたいと思っている人はいますね。するとその人は得をしていると言えませんか？

そこであなたに提案します。自分に感心を向ける目を、少しだけ周りの人に向けてみましょう。周りを見渡すと、あなたを支えて下さっている、多くの人の働きが見えてきて、ありがたくなるはずです。試しにお布団の香りをかいでご覧なさい。あなたが心地よく休めるようにと、お布団をお日様に当て、ふっくらと干して下さったお母さんの思いが見えてきて、満ち足りた心になりませんか？　それが得を

した瞬間です。厳しい職場を背負って働くのも、実は、神様があなたに「この仕事を通して、社会のお役に立ってくれまいか」と、願われてのことだと私は思います。

またあなたは教会にお参りすることを、躊躇（ちゅうちょ）されているようですが、お参りすると大きな幸せを築く元を頂けます。要するに人間は、目先の損得よりも人生の意味を見出せるかどうか、ではないでしょうか。ちょっぴり勇気を出して参拝してみて下さい。決して損はさせません。

次は埼玉県にお住まいの、44歳になる男性からの質問のお便りです。

「私は転勤族なのですが、どこへ行っても個性の強い人が多く、嫌いなタイプばかりに出会うのです。あまり良い思い出がなく、今でも思い起こすと腹が立つことがあります。信心すると、人の好き嫌いが無くなるのでしょうか」といった質問です。

あなたは、ご自分の気持ちに正直な方ですね。お手紙を拝見すると、ご自身の心を見つめ直そうと、努力されているようですね。ありがたいことです。

「信心すると人の好き嫌いが無くなるのでしょうか？」というご質問ですが、答えを急がずに少し考えてみましょう。ところであなたは、ご自身を本気で大切にしたいと思われていますか？　また自分を大切にするということは、どうすることでしょうね。

ここで少し、私の体験を聞いて下さい。子どもの

ころの私は食べ物の好き嫌いが激しく、母に大変心配をかけました。大人になっても、嫌いなものは嫌いと押し通しましたが、それでいて別に不自由は感じませんでした。

そんなある日、金光教の信心をしている父と外食を共にした時のことでした。私の食事の様子をうかがっていた父が「まだ嫌いなものがあるようだな。お前は生きる上で窮屈だろう」と言って、次のような話をしてくれました。

苦い辛いも含めて食物は、人間の命を生かし、体を健やかに育んで下さろうとする神様が、作り与えて下さった恵みであること。その恵みを嫌うということは、私を生かそうとされる神様の働きを避け、神様から遠ざかることである、といったものでした。要するに嫌いな物が多い分、食生活が貧しく生きづらいものになる、ということです。そして最後に父は「人間関係も同じことが言えるぞ」と、話を結びました。

今、地球の人口は60数億人です。でもあなたが一生涯にかかわり合う人の数は、両親から始まってほんの一握りです。この一握りの人たちがあなたを育て、人格を作り、生活の側面を支えているのではないでしょうか。限られた一握りの人たちは皆、あなたのために差し向けられた、神様からの宝物です。人にも苦い辛いがありますが、それを嫌うと言うことは、窮屈な立場を自ら選択していることになります。人生はちょっとしたことで貧しくも豊かにもなるものです。あなたの人生が幸せでありますように

願っております。

草さん、ごめんなさい

金光教放送センター

ナレ　「天と地の間に人間がいる。天は父、地は母である。人間、また草木など、みな天の恵みを受けて、地上に生きているのである」これは金光教の教祖、金光大神の教えの一つです。今日は、この教えについてのお話です。

聞き手　先生、こんにちは。

先生　こんにちは、お久しぶりですね。どうですか、こちらの生活に少しは慣れましたか。

聞き手　ええ、まあ…。

先生　おやっ？　元気ないですね。確か、自然がいっぱいの生活にあこがれてこちらに移って来られたんですよね。

聞き手　そうなんですが…。

先生　一体、どうされたんです？

聞き手　はい、来る日も来る日も草取りに追われているんです。時間があれば外に出ていますが、なかなか終わらなくって。やっと終わりに近づいたかと思ったら、最初に抜いたところからまた新しく生えていて、やってもやっても私の仕事は終わらないんです。腰も痛くなって、もう大変で…

先生　そうでしょう、そうでしょう。よく分かりますよ。街中と違って家の周りが全部土ですからね。それに畑も広いようですし、草取りは、本当に終わりのない仕事ですよね。

聞き手　はい。ついつい草が憎々しくなって、むしり取っています。

先生　おやおや、憎々しいとは。それでは草がかわいそうですね。

聞き手　えっ、かわいそう？

先生　ええ。先日、ある方がね、こんなこと言っていました。「草さん、せっかく生えたあなたの命をうばってごめんなさい」などと声をかけながら草取りをするそうです。

聞き手　へえ～「草さん、ごめんなさい」ですか。

先生　はい。またその方はね、心配事があったり、イライラして心が乱れている時には、外に

出て草取りをするんですって。草取りに夢中になっていると、いつの間にか心が落ち着いてきて、気持ちが安らいでくるそうですよ。

聞き手　私と反対ですね。

先生　それにね「抜いても抜いてもまた生えてくる草。あのたくましい雑草のエネルギーに感心しながら草取りをしていると意外に仕事がはかどっていました」って。

聞き手　へぇー。

先生　草も人間の都合で引き抜かれるのですからね。普段私たちは自分の役に立つか立たないか、都合が良いか悪いかだけで物事を見てしまいがちです。生活する上でやむを得ず草を抜くということもありますが、それを仕方のないことだと済まさずに、お断りするという気持ちは大切だと思いますよ。それに、雑草などという名前の草はないですし、草の中には私たちの役に立ってくれているもの、驚くほどたくさんあるんですよ。薬草であったり、栄養があっておいしくて食べられる食材もたくさんあります。可憐な花も咲かせてくれますし。

聞き手　そうですねぇ…。

先生　それに草が生えないような土地には、野菜も花も木も育ちませんしね。それでは、人間は生きていけませんよ。草が生えるのは土地が生きている証拠です。草だって、人

間と同じように天と地の恵みをいっぱい受けて生きているのです。

聞き手 天と地の恵みですか。

先生 そうですよ。草木は太陽の光や熱、雨などの天の恵みをいただいて育つでしょ。あなたも野菜を育てていると、天の恵みについていろいろ気づくことあるんじゃないですか。

聞き手 はい。夏、暑くて晴れた日が続くと、トマトなんかはすぐに驚くほど真っ赤に熟れて、それはおいしいです。

先生 そうですね。反対に日照時間が少ないと実のなりがよくありませんよね。人間は、世話をしているとつい自分が作ったかのように思いがちですが、そうではないですね。そして、地の働きもすごいですよ。土は自然物の一切合切すべて受け入れ、それを肥やしにして新たないのちを生み育てます。私はね、アスファルトの上で動かなくなった昆虫などを見つけると、拾って土の上に移してやるんです。

聞き手 それはどうしてですか？

先生 どんな命であっても、最後は土に還ってほしいと思って。そうすると、死骸は分解されて、他の新たな命を生み育てる働きができますからね。

聞き手 そうですね。それぞれの命が、土の中で働き合って、姿を変えて…、後々のお役に立

っているということですね。

先生　そう、土の中には、計り知れない程たくさんのいのちがうごめいているのです。大きくて温かくて時に厳しい天の恵みを受け、そのすべてを受け入れ、それを肥やしにしていく地の上に生かされているのが私たち人間であり、そして草木なんですね。ちょうど、父、母の懐の中に抱きかかえられるようにしてね。

聞き手　お話を伺っているうちに、私…草を憎々しく思う自分が恥ずかしくなってきました。私も「草さん、ごめんなさい」と、声をかけながら草取りをするようにしてみます。

先生　それはよかった。草木も人間も、どれ一つとして漏れることなく、天と地の恵みを受けて、命を頂いて生かされ育ったもの同士である、ということを忘れないようにしたいものです。

聞き手　はい、そうですね。先生、今日はありがとうございました。

先生　ありがとうございました。

ナレ　「天と地の間に人間がいる。天は父、地は母である。人間、また草木など、みな天の恵みを受けて、地上に生きているのである」今日は、この教えについてのお話でした。

油断、慢心、大けがのもと

金光教放送センター

ナレ　「猿も木から落ちるという。木に登っても、危ない危ないと思っていると、用心するからけがはないが、少し上手になると、大胆になって大けがをしたり命を落としたりする。慢心は大けがのもと、健康であっても信心の油断をしてはならない」

これは、金光教の教祖、金光大神の教えの一つです。今日は、この教えについて、先生にお話をお伺いします。

聞き手　先生、よろしくお願いします。

先生　こちらこそよろしく。

聞き手　今日の教えの中にあります「猿も木から落ちる」は、私にはとても耳の痛い言葉なんです。

先生　そうなんですか、これは油断や慢心を戒めた「ことわざ」なんですがね。

聞き手　私、子どもの頃から油断や慢心が多くて、失敗ばかりしているんですよ。最近もやってしまいました。

先生　えっ、どんなことですか。

聞き手　車の運転です。私、免許を取ってからずっと慎重に運転していたんですよ。それで、ずっと無事故無違反で、免許証ももちろんゴールドです。本当に安全運転なんですよ。

先生　それはいい心がけですね。

聞き手　ところが先日、隣に友達を乗せて運転していたら、そのことが話題になって。それで、友達から「ずっと無事故無違反はすごいわね、あなた運転上手なのね！」って言われて。そう言われると、ついいい気になってアクセルをちょっと踏み込んだ途端、ちょうど警察が取り締まりをやってて、スピード違反で停められてしまいました。

先生　ああ、つい慢心が出てしまいましたね。でも、スピード違反で捕まったことは残念でしょうが、事故に遭ったりけがをしていたらもっと大変だったのではないでしょうか。恥ずかしい話、私は痛い目にあって気付かされたことがあるんですよ。

聞き手　え～、先生がですか？

先生　はい。1年前のことですが、妻から頼まれて洋服の入った箱を2階へ持って上がることになったんです。こう見えても私は意外と力持ちなんですよ。若い頃空手をしていましたから。それで力仕事はいつも任されるんですが、その時は思ったより重くなかったんです。こんなに軽いのなら自分で運べばいいのにと思って、2個目の箱を持ち上げた瞬間、やってしまいました。ぎっくり腰です。そこからもう動けません。大変でしたよ～。

聞き手　そうなんですか。

先生　病院で「ぎっくり腰は案外軽いものを持ち上げた瞬間なったりするんですよ」って言われたんです。日頃の運動不足と年齢による筋力の衰えを指摘されてしまい、確かに思い当たることだらけでした。でも、私は若い頃からの力自慢でつい慢心が出てしまい、また荷物も軽かったので油断してしまいました。

聞き手　先生でもそういうことがあるんですね。

先生　人は健康であれば、何でもできることがつい当たり前になってしまうんです。健康のありがたみは病気やけがをして初めて気付くと言ってもいいかもしれませんね。私もぎっくり腰になった時は、いつにもまして神様にお礼申しました。

聞き手　えっ・・・お礼ですか？

先生　はい、お礼なんです。もちろん早く治ることもお願いしましたよ。でも、ぎっくり腰になってみて、健康な時はそれ程気にもかけなかったことが出来ていたんだと改めて気付かされたことに、神様にお礼申し上げたくなったんですよ。私たちは、水や空気、食べ物など神様のお恵みやお働きがあって、生かされて生きているお互いなんですね。でも、病気やけがの時だけ神様にお願いし、健康であれば神様を抜きにして、あたかも自分の力だけで生きているように振る舞ってしまいます。やはり健康な時の心

がけが大切なんですね。あなたもこれから、車を運転する時は、神様にお願いして、させてもらったらどうでしょうか。

聞き手　はい。私も都合のいい時だけ神様にお願いしていて、普段はやはり神様を抜きにしていました。これからそうさせてもらいます。ところで、教祖様には油断慢心など無かったんですか。

先生　こんな話がありますよ。教祖様の元に、有名な柔道家がお参りに来て「金光様、あなた様ぐらいの信心がお出来になりましたら、もう安心でございましょうなあ」と言ったそうです。すると教祖様は「いいえ、そんなことはございません。あなたこそ、日本で5本の指に数えられるような達人ですから、もう安心でしょう」と反対に聞き返しました。柔道家は「いいえ違います。普段、ただ道を歩いていましても、十分に注意をして歩いています」と答えたそうです。その答えをお聞きになり、教祖様は「あなたもそうですか。私も同じことで、油断をすれば、いつ何時（なんどき）、神様からお暇が出るか分かりません」と言われたといいます。

聞き手　へえ〜、今の話からすると、教祖様でさえ常に信心の油断や慢心に対して取り組んでおられたのが分かりますね。

先生　そうですね。油断や慢心は無くなるもので

はないのかもしれません。無くなったと思った瞬間に、また油断慢心が生じているとも言えますからね。私たちも信心の油断をしないように、何事も一日一日時々刻々（じじこっこく）に神様にお願いしながら取り組んでいくことが大切だと思いますよ。

聞き手　はい。先生、今日はありがとうございました。

先生　こちらこそ、ありがとうございました。

ナレ　「猿も木から落ちるという。木に登っても、危ない危ないと思っていると、用心するからけがはないが、少し上手になると、大胆になって大けがをしたり命を落としたりする。慢心は大けがのもと、健康であっても信心の油断をしてはならない」

今日はこの教えについて先生にお話をお伺いしました。

海は誰のもの？

金光教放送センター

ナレ　「この大地もその他の物も、みな神の物であるのに、わが物である、わが金ですると思い、神にお願いしないでするから、叱られるのは無理もない。家を建てるにも、神にお願いして、神のお土地をお借りし、今までの無礼をおわびして建てればさしつかえない」

これは金光教の教祖、金光大神の教えの一つです。今日はこの教えについて先生にお話をお伺いします。

聞き手　先生こんにちは。

先生　はい、こんにちは。

聞き手　先生、今の教えの「この大地」や「その他の物」というのは、例えば、今私たち人間が住んでいる土地や家のことなんかを指しているのでしょうか？

先生　そうですね。

聞き手　じゃあ、私の家も土地も、全部神様の物、ということですか？

先生　もちろん、そうですよ。

聞き手　え～、何かショックです。この春、やっと手に入れた一戸建てが自分たちの物ではないなんて。

先生　自分の名義になったから自分の物、のよう

に思っていたんですね？

聞き手　はい。

先生　そうですねえ、確かに自分の名義になったら、自分の物のように思いますよね。私も若い頃には、そんな気がしていましたよ。でも、ある時から、何かそれは違うなあ、と思うようになったんです。

聞き手　そうなんですか。

先生　私は若い頃、海釣りが大好きで、よく行ってたんですね。時には友達に船で連れて行ってもらったりもしていました。で、そのうちにだんだん気が付いたんですが、あの広い海ですが、誰でも自由に、どこで釣ってもいい、というわけではないんですよ、知っていました？

聞き手　ええ？　そうなんですか。知りませんでした。でも先生、海ってずっと昔からあるもので、誰の物でもありませんよね？　だったら、どこで釣りをしてもいいような気がするんですけど？

先生　海には漁業権というのがあって、誰でも自由に、というわけにはいかないんです。でも、それだからといって、海が〝特定の人の物〟というわけではないんですよね。

聞き手　そうですよね。海は昔からあるんですから〝誰かの物〟というのは変だと思います、絶対。

先生　だったら、それと同じように考えてみてく

ださい。この土地も海と同じように、昔からありますよね。それを、お金を出したから自分の物、というのはおかしくないですか？

聞き手　そう言われてみるとそうですね。そんなこと、今まで一度も考えたことありませんでした。

先生　海だと「何かおかしい」と感じても、このお土地については「ここは誰々さんの土地」なんていう言い方に慣れているからでしょうね。「土地は昔からあるのに、個人の物なんて、それはおかしい」とは誰も言わないですね。

聞き手　そうですね。

先生　ずっと昔からあるはずなのに、お金を出して買ったりして、いわゆる〝土地の所有者〟が生まれる。それで、所有者になった人は「ここは私の物」ということで、自由にしてもいい気持ちになるんでしょうね。

聞き手　じゃあ、先生。土地もその他の物も神様の物、というのはどういうことですか。

先生　そうですね、このお土地には、先ほどの海もそうなんですけど、人間やその他の動物や植物を生かし、育むという働きがありますよね。

聞き手　生かし、育むですか？

先生　はい。例えば「米や野菜を作った」なんて言いますが、厳密に言うと、本当は「天地

のお働きで育った」と言う方が正しいのではないでしょうか。もちろん、人間は土地を耕したり肥料をやったりして、その天地の働きを助ける、ということはしてますけど。元はお百姓さんだった教祖金光大神は、すべての物を生かし育むという、天地の働きを見て「この天地こそ、まさに神様だ」と気付かれたのでしょう。言うなれば、天地は神様そのものなんです。ですから、農作物も、それから海の魚も、全部神様の物、というわけなんです。そんな天地に、われわれ人間が後から住まわせてもらうようになったんですね。まあ言うなれば、神様から間借りしてるようなものです。

聞き手 間借り、ですか。

先生 そうです。間借りをしているのですから、自分勝手に自由にしていいわけがない。ですから、家を建てたりする時には、神様にちゃんとお断りをしてから建てる、というのは、むしろ当たり前のことなのかもしれませんよね。

聞き手 じゃあ先生、教えの「叱られるのは無理もない」というのは、どういうことですか？

先生 それは、昔ある人が「神様なんて関係ない」と言い張って、自分勝手に家を建てようとしたけど、いくら頑張っても成就しなかった、ということがあったんです。

聞き手 そんなことがあったんですか。

先生　でも「神様に叱られるから、ちゃんとお断りしなさい」というのではなくて、「神様のお土地だから、お断りしてから建てなさい」と言っているんですよ。でも、自分の物だと思うと、なかなかそれが出来ないんでしょうね。それで無礼になる。

聞き手　無礼、ですか？

先生　はい。無礼というのはその字の通りで「礼がない」ということなんですね。お土地に、つまり神様にお世話になっているのだから、そのことをちゃんと「ありがとうございます」とお礼して、それから「神様、家を建てさせて頂きます」とお断りもして、それから普請することが大事だと、教祖様は仰っているんです。

聞き手　先生、よく分かりました。私も今日から、神様から間借りさせてもらっていると思って、感謝しながら住まわせて頂きたいと思います。

先生、今日はありがとうございました。

先生　はい、ありがとうございました。

ナレ　「この大地もその他の物も、みな神の物であるのに、わが物である、わが金ですると思い、神にお願いしないでするから、叱られるのは無理もない。家を建てるにも、神にお願いして、神のお土地をお借りし、今までの無礼をおわびして建てればさしつかえ

ない」

今日はこの教えについてのお話でした。

先生、オレオレ　実です

金光教放送センター

ナレ　「四季の変わりは人の力におよばないことである。物事は時節に任せよ」

これは、金光教の教祖、金光大神の教えの一つです。今日はこの教えについてのお話です。

聞き手　先生よろしくお願いします。

先生　こちらこそよろしくお願いします。

聞き手　今日、ここへ来るまでの道で蛙が鳴いていたんです。ああ、蛙の鳴き声って久しぶりだなあって思いながら、今年も夏がやって

くるんだなあって、とっても嬉しくなったんです。

先生　そうですねぇ。ある人がね、この季節の移ろいのときに一番神様を感じるって言ったんですよ。神様ってね、目に見えないからなかなか実感出来ないものだけれど、寒い寒いと思っていたのに、ある日、日差しが柔らかくなっているのを感じたり、暑い暑いと思っていても、ふと空を見上げると秋の雲になっていたり…、そんな時は「神様ありがとうございます」と思わずつぶやいてしまうと言っていましたが、本当に何とも言えず、うれしくありがたいものですね。

聞き手　はい、これぱっかりは私たちの力ではどうしようもないことですものね。ですから先生、今日の教えにある「四季の変わりは人の力におよばないことである」というのはよく分かります。じゃあ、それに続く「物事は時節に任せよ」というのはどういうことなのですか、先生。

先生　それはね、私たちが出会う様々な出来事の中には、先ほどの四季の移り変わりのように、私達にはどうしようもないこともありますよね。だから神様のお働きを得て、やがて願いとすることが成就しますように、神様にお願いしてお任せする。そして、その時がやってくるのを、焦らず心配せずに待ちましょうということなんですよ。

聞き手　はあ、そういうことなんですか。まあ、そうですよねえ。何でも神様にお任せすればいいんですよねえ。私達の力って小さなものですものねえ…。

先生　おや、何かあったのですか？

聞き手　…実はこの間、教え子と出会ったんです。

先生　それはそれは、久しぶりでうれしかったでしょう。あなたが小学校の教師をしていた時の教え子だから、今はもう…。

聞き手　高校二年生です。私が家の前を掃除していると「先生」と言うから、振り返ってみると、何だか大きな高校生が突っ立って「俺です、オレオレ」って。

先生　はは、何かオレオレ詐欺みたいですね。

聞き手　そう言われてみればそうですね。でもその時はもう訳分からずにポカーンとしていると、「俺、実です」って言うんです。「えーっ！ あの実君!? だって実君ってこんなに小さかったんだよ、えーっ!?」なんてびっくりして。でもよく見たら顔は小さい頃のままなんですよね。久しぶりに楽しく話しました。

先生　よかったですね。

聞き手　ええ。その実君が帰りがけにね、ふと「先生、俺、サッカー部に入ってんねん。練習は厳しいけど、レギュラーになりたいから毎日学校行ってるし、遅刻もしてないでえ」、そう言うんです。

先生　ほう、あなたが知っている実君は、そんな子じゃなかったんですか？

聞き手　ええ。ついつい朝寝過ごしたと言っては学校を遅刻したり、休んでしまう。多分、夕べ宿題が出来てないかなあ、なんて時はやっぱり学校にこれないことが多くて、あの頃は、毎朝起きた途端に「今日は実君来るだろうか…」って一番に思い浮かべる、そんな子でした。

先生　その実くんが高校では毎日学校に行っている。すばらしいことですね。

聞き手　はい、私もよかったなあと思ったのですが…、実君と別れてから、何だか気持ちが変わってきて…

先生　どういうように。

聞き手　なんとか実君に学校に慣れてもらおう、毎朝学校に来てもらおうと、私何度も実君の家に行ったり、みんなで話し合ったりしました。でも十分な成果を挙げられなかったんです。私だけじゃなく、その次の先生も、また次の先生も、中学の先生も、みんな実君に登校してもらおうと、それは大変な努力をされていました。

先生　あなたも毎朝学校に行く前に教会に来て、子どもたちの事を祈っていましたね。

聞き手　はい、だんだん学校に慣れてはきてくれたんですが、それでも休みがちで…。

先生　先生方みんな努力されてたのに…つらかっ

たでしょうねえ。

聞き手　何とか学校へ行ってほしいなあって、実君が卒業してからもよく先生たちと話していたんです。だから高校休まずに行けてよかったなあと…それでいいんです。いいんですけど…高校に行ってクラブに入ったから、もう休んでないって、結局私達のしたことは何だったんだろうって、ちょっと寂しくなったんです。

先生　そうかなあ。でもね、私には「学校に毎日行ってる」と言った実君の言葉、とても心に響きます。実君はそれをあなたに言いたかったんだなあって。実君もとっても学校へ行きたかったんだなあって。それに、あなたがずっと神様に祈っていたように、それぞれの先生方が実君のために苦心し、努力してくださってることもきっと分かっていた。でもね…。

聞き手　はい。

先生　花でもね、いくら土だ、肥料だ、水だと用意して与えてみても、すぐには咲かないでしょう。花の咲く時期を待たないといけないんです。

実君も今まで接したたくさんの先生の努力、あなたの祈り、そして、自分の学校へ毎日行きたいなあという思いがあって、その上に日々を重ねて、つまり時節を頂いて初めて今大きな花が咲いた。学校に行くこ

とが出来たんですよ。

聞き手　…そう言われれば、う～ん…。実君、私にその言葉を言いに来てくれたんですかね。

先生　きっとそうですよ。

聞き手　分かりました。何だかちょっと嬉しくなってきました。

先生　そりゃあよかった。自分でも考えこんで悩んだり、苦しんだりするよりも「自分たちにできることはいたしました。あとはどうぞ神様お願いいたします」と神様のお働きを信じてお任せする。それが大切なんですね。

聞き手　はい。先生、今日はありがとうございました。

先生　いいえ、こちらこそありがとうございました。

ナレ　「四季の変わりは人の力におよばないことである。物事は時節に任せよ」

今日はこの教えについてのお話でした。

しあわせ探し

金光教放送センター

小学校に入学したばかりのマキちゃんは、夢と希望に胸を膨らませていました。

「1年生になったらね、友達たくさん作るの。お勉強も頑張るの」

けれど、入学して2、3カ月経ったころ、なんだか元気がなくなり、言葉数も少なくなりました。マキちゃんはすっかり笑顔をどこかに忘れてきてしまったようです。

しまいには、「おなかが痛い。学校を休む」と言い出したのです。

そこでお母さんが聞きました。「どうしたの？ マキちゃん？」。

すると、「だって！ 楽しくないんだもん！ 思っていたのと違うんだもん！ お友達も全然出来ないし、お勉強だって分かんないんだもん！」と、涙を浮かべています。

「あらあら……、それはつらかったわねぇ……。でも、マキちゃん、嫌なことばかりで、楽しいことは一つもなかったの？」

そうお母さんが聞くと、マキちゃんは大粒の涙をポロポロこぼしながら、大きくうなずきました。お母さんが続けます。

「困ったわねぇ……。そうだ、マキちゃん。毎日が楽しくなるように、お母さんと一緒に『しあわせ探し』してみない？」。

マキちゃんはきょとんとして、お母さんの話を聞きました。

「いい？ 右手と、左手をグーにしてごらん。そうそう。で、今みたいに悲しい、嫌なことがあったら、右手の指を立てて数えてみるの。で、左手は、楽しい、うれしいことがあった時に、同じように指を立てて数えてみるのよ。どっちが先にグーからパーに変わりそうかな……？」

するとマキちゃんは「……右手……」と答えました。

「そうよね。今のマキちゃんは悲しい、嫌な気持ちのほうが多いから、右手のほうが先にパーになっちゃうよね。うれしい、幸せな気分にはなれないかな？ 難しい？」

マキちゃんは、涙をまだいっぱいためた目でうなずきます。

「そうねぇ……」。お母さんはマキちゃんを膝に抱っこしてこう続けます。

「嫌なこと、つらいことはすぐに見つかるけど、うれしい幸せなことって、頑張って自分から探さないと見つかりにくいのかもね。そうだ。一日の終わりに、お母さんと一緒に数えてみようよ。ね？ うん。そうしよう」

マキちゃんは突き出した小さなグーの両手をじーっと見つめました。

それから、マキちゃんの「しあわせ探し」が始まりました。最初はなかなかうれしいことが見つかり

ません。一日の終わりに思い出すのは嫌なことばかりです。

「今日も誰とも遊ばなかった。楽しくなかった」と、お母さんの膝の上で泣きべそです。

「必ず、幸せは近くにあるよ」とお母さんは毎日励ましました。

「『おはよう』って、友達に声かけた？『おいしい』って、給食食べた？」と、うれしいことが増えるように、お母さんはマキちゃんに話しかけます。

ある日、「今日は、勇気を出してあいさつしたら、みほちゃんが、『おはよう』って言ってくれた！」と、やっと左手の指で、一つうれしいことが数えられました。

「やったね！ 頑張ったね！」

お母さんはマキちゃんを抱き締めて、一緒に喜びました。

「毎日もっと増えるといいね！」とのお母さんの言葉に、マキちゃんは大きくうなずきました。

そんなある日、マキちゃんが息を弾ませて帰ってきました。

「お母さん！ お友達が出来たの！」

「まぁ！」とお母さんはマキちゃんと一緒に大喜びです。

「すごいじゃない!! よかったわね！」

「うん!!」

マキちゃんはとびきりの笑顔です。一生懸命お母さんに話します。

先日の体育の授業の時に、同じクラスのみほちゃんが転んで、膝をすりむいたのです。その時、マキちゃんは思わず、持っていた自分のタオルですぐに血をぬぐってあげたのです。今日、そのみほちゃんが、照れくさそうに「マキちゃん。こないだはありがとう」と言って、洗濯したタオルを返してくれたというのです。

「遊ぶ約束したの。行ってきまーす！」

うれしそうに、マキちゃんはランドセルをお母さんに押しつけて、飛んで行ってしまいました。

「あらあら」

お母さんもうれしそう。

このことをきっかけに、マキちゃんは「しあわせ」と思えることがどんどん増えてきました。

「お名前が自分で書けるようになったよ」

「お友達が増えたよ！」

毎日お母さんと数えるうれしいことは、いつの間にか片手だけでは足りなくなり、両手を使うようになりました。しまいには、「今日は両手では足りないの」と、靴下を脱いで、足の指も使って数えました。

いつしか、わざわざ嫌なことを数えなくなりました。マキちゃんはいつも笑顔でいっぱい。お友達もいっぱい。楽しそうにしているマキちゃんを見ているだけで、幸せな気分になれるほどでした。

そんなマキちゃんも今は高校生です。

「一日の終わりに色々振り返って考えると、嫌な

ことも思い出すけど、翌朝には新しい気持ちで取り組んでいけば、自然と元気になれる！」と、今日も笑顔です。

今ではもう指でうれしかったことをわざわざ数えたりはしません。そんなことをしなくても、しあわせを探す名人になったからです。

あなたもしあわせ探し名人を目指して、しあわせを探してみませんか？

わが家の園芸日記

金光教放送センター

私は地方都市で会社に勤めている。結婚して、妻と2人、アパート暮らしを楽しんでいたが、子どもが出来たのを機会に、会社の家族宿舎を申し込んだ。その方が、ぐっと生活費を節約できるからである。

生来、くじ運の悪い体質なので、いい宿舎が当たるとは期待していなかった。

ところがである。すばらしい宿舎が当たったのだ。車が無いと買い物には不便だが、何と一戸建てで庭付きの宿舎である。庭付きの家に住めるという幸運に、私たち夫婦は小躍りして喜んだ。さあ、この庭で何をしよう。そうだ。花壇を作ろう。花を育てる

のだ。

こうして、花壇での奮闘の日々が始まった。

さて、何を植えよう。妻に、好きな花はあるかと聞いたら、コスモス畑が好きだという。そこで、コスモスの種を買ってきてまいた。3月植えである。夏過ぎにまくのと比べ、成長期間が長いため、ぐっと大きく育ち、たくさんの花を付ける。とは、にわかに買い込んだ園芸本からの知識である。

じょうろで1日2回水を与える。土の湿り気を欠かしてはいけない。しばらくすると、芽が出た。何とみずみずしい色をしていることか！ しかし、なかなか成長しないなと思っていたら、ある日、小雨が一日降った。すると、芽がぐぐっと伸びた。それ以来、嫌いだった雨が待ち遠しくなった。

予定通り、コスモスはすくすく成長した。夢のコスモス畑までもう少しである。

――ところが。

9月に入ったある夜、強い風が吹いた。朝起きると、コスモスは、すべてなぎ倒されていた。成長し過ぎたため、風にもろいのである。私は、竹を切って、花壇の周りに垣根をこしらえ、コスモスたちを支えた。次の夜、また風が吹いた。コスモスたちは、垣根ごとなぎ倒された。私は、四隅に金属の杭を打ち込んで垣根を補強した。さらに、縦横に何本もひもを張ってコスモスたちを支えた。次の夜、また風が吹いた。コスモスたちは倒れなかったが、支えにしたひもの部分で、くしゃっと折れた。

大自然に刃向かうには、知恵も力も足りないと悟った私は垣根を外し、成り行きに任せることにした。コスモスたちは風に倒されながらも、茎の根元に近い部分や先端の部分を持ち上げ、地にはってうねうねと成長しつつ、大空に向かって茎を伸ばし、花を咲かせていった。それは花壇を大きくはみ出し、予定したより2倍近い面積に広がって、計画とは違うけれど、色とりどりの立派なコスモス畑となったのだった。

ある年には、ケイトウの種をまいた。鶏のトサカのような形をしたケイトウではなく、ロウソクの炎のような形に育つケイトウである。やがて、芽が出てきたのだが、まく時に風で飛んだのか、花壇とは離れた庭の真ん中にも芽が出た。すぐ枯れるだろうと思っていたが、成長の速度は遅いものの、ゆっくりと育ち続けた。やがて、花壇のケイトウたちは赤や黄色やオレンジの鮮やかな花を咲かせていった。少し遅れて、花壇の外のケイトウも花を咲かせた。黄色のなかなか大きな花房だけれど、野良犬の毛並みのように、ところどころはげたような部分がある。それでも、茎もずいぶん太く育って、たくましさを感じさせた。

時は過ぎ、花壇のケイトウたちの色はあせてゆき、霜が降ると、枯れていった。なのに、はぐれ咲きのケイトウは枯れる気配がない。やがて、1月となり、2月となったが、まだ咲き続けている。私はなかなかそのケイトウを抜く気になれなかったが、3月に

なって、花壇に新しい種をまくころ、「今日までよく頑張ったな」と声をかけ、抜こうとした。

抜けない。

カスカスに枯れているだろうと思った茎は、棍棒のように固く、その根はしっかりと大地をつかんで、放そうとしない。私は、なおも力を加えていった。やがて、バキッ！ というすさまじい音がした。ついにケイトウが折れたかと思ったら、土が引き裂かれた音だった。続いて、バリバリッ、ミシミシッという音をさせて、ケイトウはやっと地面から離れた。反動で尻餅をついた私は抜けたケイトウを見てあぜんとした。

あり得ない。ケイトウというのは、真っ直ぐ下のほうに根を下ろす。ところが、このはぐれ咲きのケイトウは、四方八方に信じられないほど大量の根を張っていたのである。網の目のように細やかで、針金のように強い根だった。

花壇に芽吹いたケイトウたちは、育ちやすい柔らかな土壌とあふれんばかりの栄養を受け止めて、苦労知らずに美しい花を咲かせていった。しかし、このケイトウは固く栄養のない土地に芽吹き、必死に根を張って生き延びてきたのだ。そして、立派に花を咲かせ、最後は化石のようになりながら、立ったまま命を終えていたのだ。その生命力の強さを目の当たりにして、私は、感動を覚えながら、随分長いこと、庭に座り込んでいた。

いまさら

金光教放送センター

光男さんは今年87歳になるおじいさん。若い頃から年に1、2回、私の奉仕する教会に参拝している。その光男さんだが、2年ほど前から、急に毎日お参りしてくるようになった。そのきっかけは、どこかで私の話を聞いて、「毎日お参りしてみよう」という気になったからしい。ちょっと腰は曲がっているけど、今でも、長男夫婦と3人で野菜や果物を作っている現役のお百姓さんだ。

毎日のお参りを始めた最初の日、光男さんが「せめてもう10年、元気で野菜が作りたいんですが、こんなお願いは欲張りでしょうか？」と尋ねるから「そんなことはないですよ。思ったとおりに、そのまま神様にお願いされたらいいんです。でも、10年だと95歳できりが悪いから、100歳までにしたらどうですか？」と私が提案すると「それじゃあ先生、あと15年というのもきりが悪いので、欲張りついでにもう20年というのはダメでしょうか？」と、真顔で聞いてくる。「分かりました。神様にそう、しっかりお願いしておきますから、光男さんも神様におすがりしながら、頑張って下さい。それと、今日まで85年間、元気でやってこられたこと、それを神様にお礼を言うことを忘れないで下さいね」。

こうして、「105歳まで元気でお百姓を」と神様にお願いした光男さんは、片道10キロほどの田舎道を、毎日、軽自動車を自分で運転してお参りしてく

るようになったのだ。

昨年の初めのこと。いつものように教会に現れた光男さんだが、珍しく浮かない顔をしている。訳を尋ねると、ちょっとさびしそうにこう切り出した。

「実は先生。近所の農家の仲間に『今年からトマトのハウス栽培を始める』と言ったら、『今更その歳でハウス栽培はないだろう』と、示し合わせたかのように誰も賛成してくれないんです。本当にこの年になったら、もう新しいことを始めてはいけないんでしょうか？」

私もちょっと心配になったので「でも、あまりお金をかけると周りに心配をかけますよ」と言うと、「近所に使ってないハウスがあるから、それを借りることになっている」と言う。息子さん夫婦も「おじいさんのやりたいようにやったら」と言ってくれているらしい。「それじゃあ、何の心配もないじゃないですか。神様にお願いしながらやってみたらどうですか」と私が答えると、うれしそうに光男さんはうなずいた。

「ところで光男さん、なぜまた急に、毎日お参りする気になったのですか？」。改めて訳を尋ねてみると、「先生の話を聞いて、これからどのように生きるべきか改めて勉強したくなった」という。う～ん、そんな難しい話したことあったかなあ。

私は今年60歳。若い人たちからは不思議がられたりするのだが、ワープロは使えても、パソコンとな

るとどうも苦手である。ところが最近、愛用していたワープロの調子があまりよくない。画面はかなり薄暗くなっているし、キーボードにもかなりガタがきている。そろそろ買い替えの時なのだが、困ったことに、ワープロなんてもうどこにも売ってないのだ。

ところが、無理に探せば、あるところにはあると聞き、「それだったら」と、何とかしたくなって、息子にそれを頼むと「ワープロなんてやめて、パソコンにしたら」と言う。

実は自分でもそう思って電気屋さんに行ってみたのだが、パソコンのキーボードはワープロと違って英語ばかりで書かれていて、使い方がどうもよく分からない。息子にそう言い訳すると、「少し使えばすぐに慣れるから大丈夫。いつもは若ぶってるくせに。まさか父さん、『今更』なんて思ってるの？」。そう言われてちょっと焦った。

英語で書かれたパソコンのキーボードだが、本当は単純なアルファベットが並んでいるだけなのだ。でも、「ワープロなら使えるのに」という気持ちが働いてか「今更パソコンの勉強なんて面倒」と、おっくうになってしまうのだ。そう言えば、私は若い頃から「今更頑張っても仕方がない」などと言いながら、いつも努力することから逃げていたような気がする。学生の時には「今更勉強しても遅いから、もう寝よう」と、そんなことの連続だった。

光男さんと毎日話をするようになって、私は今ま

で散々使ってきたこの「今更」という言葉を、今更ながら考えるようになった。

「今更この歳」って、一体何歳なんだろう。60？80？ ホントはお互い何歳まで生きられるのか、そんなことは誰にも分からない。実際、今の日本には100歳以上の人が実に4万人もいるという。うまくいけば、誰だってその仲間入りができる可能性が大いにある。そう考えれば、私なんかあと40年も残された人生があるのだ。

85の手習いを始めた光男さんに比べたら、還暦の私はまだまだヒヨッコだ。もう逃げるのはやめて、固くなりたがっている脳みそをもみほぐしながら、立ち向かってみるか、パソコンとやらに。ちょっと手強そうだけど…。

ニューヨークの女神

金光教放送センター

「朋（とも）あり　遠方より来る　また楽しからずや。５年ぶりの再会実現、楽しみにしています」

論語の有名な一節を引いた、友人からのメールに後押しされて、一昨年の夏、私は、ニューヨークへの旅に出た。

彼の地への旅行を密かに計画していたら、友人からも、「ニューヨーク本社に転勤した」という知らせがあったのだ。「またとない機会だから」と、妻のお許しを得て、10歳の長女と２人、旅に出ることになった。

私たちを乗せた飛行機は、無事、デトロイトに到着。２時間後の国内線に乗り継げば、いよいよニューヨークだ。

ところが、天候の関係で国内線は出発を見合わせているという。おまけに長女は、「しんどい」「眠い」「帰りたい」とご機嫌斜め。日本からのフライト中、ほとんど眠っていなかったのだから無理もない。

場内放送は早口の英語でさっぱり聞き取れないが、「待っている人を見ていれば乗り遅れることはないだろう」と腹をくくった。長女もベンチでウトウトし始めた。やれやれだ。

結局、乗り継ぎの飛行機は夜10時過ぎ、６時間以

上遅れて、ようやく離陸。そこで隣り合わせたのは、ニューヨーク在住のエレーナという若い女性だった。「結婚しているけれど、今は別々に暮らしているの。いつか、夫と日本を旅したいわ」とも言っていた。

エレーナは長女に「辛抱強くて、賢い女の子だね」と声をかけ、長い待ち時間に耐えたことを褒めてくれた。そして、かばんからメモ帳とペンを取り出すと、到着までずっとお絵描きをして遊んでくれた。「深夜のフライト中、娘が退屈しないか…」と案じていた私にとって、彼女はまさに女神だった。

ニューヨークの街はにぎやかで活気に満ちている。超高層ビルの高さも想像以上だ。大勢の人々が急ぎ足で行き来し、車も慌しく走り回っている。

私は友人との再会を果たした。積もる話に花が咲き、やがて、仕事の話題になった。「外国での勤務はどう？ 文化の違いが大変では？」と尋ねたら、「いろんな国の社員がいるが、同じ人間同士だからそうでもないさ。言うべきことを言い、聞くべきことに耳を傾ければ大丈夫」と、彼らしい答えが返って来てうれしかった。

私と長女は、朝早くから起きて、精力的に観光して回った。自由の女神、ウォール街に続いて、同時多発テロの現場となったグラウンド・ゼロへと足を向ける。そこは、広大な工事現場になっていて、背の高い工事用の壁で囲まれていた。

２００１年のあの日。２人目の子を妊娠中だった妻が、長女の成長ぶりをうれしそうに話していたのを思い出す。その直後、テレビに映し出されたのはとてつもなく破壊的なあの映像だった。家族との平凡な毎日こそ掛け替えのないものであると思えた。そして、その幸せが一瞬にして消えてしまうのではないかという恐怖にも襲われた。

私はいつの頃からか、「あの現場に足を運んで祈りたい」と考えるようになっていた。「人を暗闇へと導く、無念さ、怒り、悲しみ、憎しみ。その暗い感情を慈しみや優しさに変えていける自分であり、人類でありますように…」と、この場所で祈りたかったのだ。

壁に遮られ、中は見えない。若い作業員に「お祈りをしたいのですが…」と尋ねると、壁の切れ目がある場所を教えてくれた。そして、励ますように、いたわるように、ポンと優しく肩を叩いて促してくれた。

現場に向かって手を合わせ、私たちは祈った。そして、グラウンド・ゼロをあとにする。大通りを長女と並んで歩きながら、私は飛行機で出会ったエレーナのことを思い出していた。

お絵描きの合間、エレーナに旅の目的を聞かれた私は、「テロの現場を訪ねて祈りたいのだ」と答えた。彼女は明るかった表情を曇らせ、「あの時、大切な人が大勢亡くなったわ。皆、とてもいい人だっ

た…」と言って涙をぬぐった。やがて、元の笑顔に戻ると、「遠い日本から、そのために訪ねてくれて、ありがとう」とお礼の言葉を口にして、私の眼を真っ直ぐに見つめていた。

その時私は、今もなおエレーナの心の奥に身を裂かれんばかりの悲しみや怒りが横たわっているのを垣間見たような気がした。彼女は、それを女神のような優しさに変えながら暮らしてきたに違いない。長旅に疲れた親子に、あんなにも親身に、思いやりの心で接してくれたのだから…。

日本へ発つ前の日、セントラルパークに出かけた。緑の木々が木陰をつくり、一直線に散歩道が伸びている。私たちの足元では、リスが愛嬌（あいきょう）を振りまいていた。

年老いた黒人の男性が、サクソフォーンを吹いている。日本に住んでいたという。曲が終わると、熱心に耳を傾けていた長女に「何か楽器を習っているの？」と聞いてきた。長女が「ピアノです」と答えたら、彼は日本語で「レンシュウ！」と大きな声で言ってほほ笑んだ。

「やっぱり練習かー」と私は思った。女神のようなエレーナも、抱えた苦しみを人への優しさに変えようと、心の練習を重ねてきたのかもしれない。

公園を渡る心地よい風が彼の音楽を遠くへ運び、みんなの顔をなでていた。

ごめんね

金光教放送センター

今日は、大きな商談が決まる大事な日。ここ数日、その準備に追われて、心身共にクタクタだった。

気合いを入れて出勤しようとすると、カッターシャツが無い。イライラしていると、アイロンを当てている妻の姿が目に入った。私は、「何してんねん！今頃！」と怒鳴った。すると妻は、「ごめん。昨日は子どものことでいろいろあって…」。言い終わるか終わらないかのところで、「もうええ！ 貸せ！」と奪い取るようにして、カッターシャツを着て駅に急いだ。

妻の頬に一滴の涙が流れていた。

自転車のペダルをこぎながらも、怒鳴ったことが気になって仕方がない。妻の涙も気になる。胸に浮かぶ反省の思い。妻は今妊娠していて、上の子はまだ2歳。

「自分には体験できないけど、お腹に子どもがいるというのは並大抵のことじゃないし、同居している両親の面倒だってあるというのに…」

「アッ！ 商談先に持っていく手土産を忘れてしまった。でも、まだ急げば取りに戻る時間はある。家に帰るか！ でもどうしよう、妻にどんな顔をすればいいのかなあ」

一瞬戸惑ったが、「反省した心そのままで、自分に素直でいこう」と思い直した。

急いでペダルを踏んで家に戻った。ところが玄関

の前に来ると、「謝るのか。男の沽券（こけん）にかかわらへんか。あれだけ怒鳴っておいて…」と、もう一人の自分が言う。でもその言葉に負けじと玄関を開けると、妻がいた。

心の中で「神様！」と祈りながら、「さっきは僕が悪かった！ごめん！」と頭を下げた。妻も「私こそ…段取りが悪くって…、ごめんなさいね」と言ってくれた。

お互いの心が晴れ晴れとなって、私は商談先へと向かった。

実家の母から電話がかかってきた。聞くと、カレーショップを営んでいる弟夫婦が「離婚したい」と言ってきたと言う。「またか！」と思った。実は弟には浮気がばれたことが過去に数回あり、その都度もめることになった。今回も兄として説得に行ってほしいというのだ。

さっそく両親を車に乗せて、弟の家に向かうことにした。出発前に妻が、「2人の話をしっかり聞いてあげてね」と言った。「ありがとう。それ大事なことやな」と言って出発した。

到着すると、すでに夜10時を過ぎていた。それでも弟の3人の幼子は心配で寝られない様子で起きていた。

私はまず義理の妹の話を聞いた。すると「私が悪いんです。最近、主人に女の人からよく電話が掛かってくるので、浮気をしているんじゃないかと疑ってたんです。以前のことがあるので、私もちょっと

しつこく聞いていたら、２人の間がギクシャクしてきたんです。そうしたら仕事も手に付かなくなってきて、お客さんの注文を間違えて聞いたり、レジでの計算を間違えたりすることが多くなって…。それで、夕べも何回も間違えていたら、主人の堪忍袋の緒が切れて『出て行け！』って…、…頭からコップの水をかけられたんです。それで私も売り言葉に買い言葉で、『実家に帰る！』と言ってしまったんです」ということだった。

それからあれこれと、彼女の話を何時間も聞かせてもらった。彼女は「お兄さんありがとうございました。私の話を聞いて下さって…」と言ってくれた。

次に弟とも話し合った。その第一声が彼女と同じ、「俺が悪いんや…」であった。それでも弟の方からは謝れないと言う。一度上げた拳は下ろせないのである。そこでまた弟の話をとことん聞いた。

そうこうしているうちに夜が明け、明るくなってきた。そこで、思わず私は２人に土下座をしたのである。「自分に正直になろう！ お互い悪いと思ってるんやから…」と頭を地面に付けたのである。２人とも「お兄さん、止めて！」と近づいてきたので、２人の手を取り、無理矢理握手させた。

もうそれから20年が経ち、弟夫婦は孫を持つ若いおじいちゃん、おばあちゃんになっている。

ニューヨーク・ハドソン川の遊覧船から幼児が川に落ちた。すぐさま川に飛び込んだ男性がいた。幼

児は無事助けられ、警察から感謝状が出ることになった。ところが、その男性は殺人罪で服役を終えた人であることが分かった。その人が川に飛び込んで人を助けたのである。

人間はみんな優しい心を頂いて生まれてきている。それが人間の本心である。それなのに、「俺が、私が」の我が顔をのぞかせ、自分勝手な生き方をしてしまう。でも、後から出てくる反省する心。これも人間みんなが頂いている。その反省する心のままに謝罪し、そこから改まって、自分の心を磨くことに努めたいと願う。

KONKOKYO

金光教本部　ラジオ放送係

【住所】719-0111
岡山県浅口市金光町大谷 320
【電話】0865-42-6453
【FAX】0865-42-2114
【メール】w-master@konkokyo.or.jp